令和6年度 各部・校務部の取組に関する自己評価

自己評価の評定
 A 「十分達成できた。」 (80%以上) B 「おおむね達成できた。」 (70%以上)
 C 「あまり達成できなかった。」 (55%以上) D 「達成できなかった。」 (55%未満)

	重点目標	関連する努力目標	具体的活動	各部・校務部の自己評価	
				評価	総括
小学部	友達や指導者と関わりながら学び合うという視点で授業づくりについて話し合い、小学部のめざす児童像「なかよく元気にがんばる子」を具現化する実践を進める。	(2) 授業実践力の向上 (3) 教育ビジョン「つなぐ」の遂行	授業研究を2回実施し、重点目標に照らし学習活動や手立て、3観点に基づく学習評価など、授業づくりについて協議する。	A	学び合いにつながる視点で学年ごとにテーマを設定し、授業づくりについての協議や研究授業の討議を重ねた。児童の様子観察から一人一人の実態を共有し、児童が安心して意欲的に参加できる環境設定、活動や教材の工夫など細やかな授業改善に取り組み、話し合ったことを実践に役立てることができたと考える。集団のなかで指導者や友達と関わりながら、学び合い主体的に活動する児童の姿を確認することができた。
中学部	内面の育ちや生徒個々の特性、環境に配慮した指導支援を行うことで、中学部のめざす生徒像「仲よく友達と協力し行動する生徒」につなげていく。	(2) 授業実践力の向上 (3) 教育ビジョン「つなぐ」の遂行	・4つの体験 ①愛されること②ほめられること③役に立つこと④必要とされることを積ませることで、自己肯定感や自己有用感を育てる。 ・障害の特性や個人の特性、個人を取り巻く環境に合わせた効果的な指導支援を行うため、現職教育や部会などで障害の特性や発達、環境要因について研修したり、情報共有の時間を設けたりして共通理解を図る。 ・①集団のルールを把握する。②人と良好な関係を築く。③属する社会集団のために何らかの役割を果たす。④他者や自分自身と折り合いをつける。という視点で、社会性の力を獲得できるように指導支援をしていく。	B	自己肯定感や自己有用感を育むような働きかけを行うことで、生徒は自信を付け、主体的な行動が増えたり、問題となる行動が減少したりという変化が多く見られた。教員間で「生徒の実態・支援シート」を活用したり、関係機関を交えたケース会、学年会等で個々の生徒への指導支援について共通理解を図ったりすることで、成長を目指して粘り強く指導を行っている。愛着障害や精神的に課題がある生徒についても、少しずつ行動の改善が見られるようになった。中学部全体として、互いに協力し、認め合う態度が育ってきている。
高等部	社会に関わる力を育てるための授業づくりに取り組む。	(2) 授業実践力の向上 (3) 教育ビジョンの「つなぐ」の遂行	・「仕事」「生活」「余暇」の視点を各教科の学習内容に反映させる。 ・生徒自ら振り返ることができる自己評価の工夫を行う。 ・家庭と連携し「IMJ活動」を継続し、責任をもって役割を果たす経験を積む。 ・「つまづきリスト」から顕在化した課題を指導者間で共通理解し、指導内容に生かす。	A	「仕事」「生活」「余暇」の視点や社会へのつながりを意識して日々の授業作りに取り組むことができた。また、「つまづきリスト」を整理してどのような課題が多いかを指導者間で共通理解することもできた。自己評価については「IMJ活動」での自己評価や実習評価表などで継続して取り組んでおり、生徒自身も徐々に授業のなかで振り返りができるようになってきている。今後も家庭と連携して、卒業後の生活を意識した取り組みを続けていく。
校務部	教員用の教科書や指導書を有効活用できるように、職員室の教科書・指導書棚を整備、データベースの改良を行う。	(2) 授業実践力の向上	・職員室の教科書・指導書棚を計画的に整備し、教科書・指導書のリスト及び保管場所のデータベースを見やすいものに改良する。 ・定期的にデータベースの場所や教科書・指導書リストを各部会で周知する。	B	小学部・中学部職員室にある教科書の棚を移動したことで指導書が見やすくなり、貸し出し数が昨年度より少し増えている。教員の53%がA、43%がBと回答している。しかし指導書を使用する教員は限られている。
総務部	保護者と学校をつなぐ校務部として、各部や他の校務部と連携し、学校行事や研修会等の開催方法や内容を計画・実施する。	(1) 安全で安心な教育環境の整備 (3) 教育ビジョンの「つなぐ」の遂行	・学校行事や研修会等に関係する各部や校務部と打ち合わせを行い、お互いのニーズに合った内容を計画・実施する。 ・「防災だより」の内容を充実させたり、避難訓練の様子をホームページで伝えたりして情報提供を行う。	B	6P全体会、1OP全体会、中四知P島根大会の講演をオンライン視聴したり、9月に、座談会形式で学校のことや家庭、社会のことを話し合ったりした。1月には、育成会の方を講師に迎えて「障害基礎年金学習会(教えて!障害基礎年金)」の研修会をした。11月には、PTA研修視察として2か所の施設を視察した。年間を通して校内外の研修機会があったが、研修によっては参加者数に偏りがあった。「防災だより」でPTAハートフルラインの会の防災かまどを使った活動を紹介したり、ホームページで避難訓練の様子を伝えたりした。
メディア教育	・ICT機器活用教育推進のため機器の整備と活用方法について研修を行う。 ・ICT機器やソーシャルメディアの安全な利用方法の指導や研修を行う。	(2) 授業実践力の向上 (3) 教育ビジョン「つなぐ」の遂行	・毎週月曜日にICT機器の活用方法について研修機会を設ける。 ・年に数回程度メディア教育研修を全職員対象に行い、セキュリティや著作権についての意識向上を図る。 ・授業におけるICTの活用が進むように、事例の周知や学習サポートを行う。 ・教育活動、その他校務におけるリモートでの活動が円滑に実施できるように環境の整備や技術支援を行う。	A	ICT機器の整備や活用のサポートを十分に行うことができ、教員のICT活用能力の向上につなげることができた。事例の紹介や機器やアプリケーションの拡充を図ることができ、授業でICT機器を使用しやす環境を整えることができた。保護者の方に対しては、活用場面を実際に見ていただく機会の設定が難しく、前年度の評価からは改善したものの分からないと回答された方が約2割いたので、参観授業での使用をさらに進めていきたい。
研究部	児童生徒が指導者や友達と関わりながら学びを深めていくためには、どのような支援や環境設定が有効なのかを授業実践を通して整理していく。	(2) 授業実践力の向上 (3) 教育ビジョン「つなぐ」の遂行	・「児童生徒が学び合える 集団の授業づくり」の全体テーマのもと、各部でテーマを設定し授業づくりを行う。 ・授業実践で得られた支援のポイントを整理し、今後の授業づくりに生かせるツールにしていく。	A	全体テーマの下、各部や学年でテーマを設定して、児童生徒が学び合うための支援を話し合い、授業づくりを行うことができた。授業討議では学び合うには児童生徒にどのような力が必要なのか、学び合えるための有効な支援はどのようなものかを具体的に検討することができた。各部の授業実践から出された支援については「授業づくりのチェックリスト(案)」として次年度の授業づくりの参考となるよう検討中である。
同和人権教育部	人権意識や自尊感情を高めることができる研修を実施する。	(2) 授業実践力の向上 (3) 教育ビジョン「つなぐ」の遂行	・現地研修や講演会を実施し、研修内容を人権・同和教育だよりに掲載する。 ・人権・同和教育だよりは、人権学習の児童生徒の様子や人権・同和教育に関わる情報を、より分かりやすく掲載する。 ・人権学習の参考になる図書を紹介したり、「わたし」をテーマにした人権放送や人権展の内容を工夫したりする。	B	夏期休業中や職員会での研修、保護者研修を通して、人権について考える機会を設けることができた。人権放送の絵本の読み聞かせや人権展の学習では、「大切なわたし」をテーマにした内容を取り入れ、児童生徒の実態に応じて学習することができた。それらの活動内容を人権・同和教育だよりに分かりやすく掲載することができた。人権放送や人権・同和教育だよりの内容については、内容が難しい、ここ数年同じような内容という意見もあり検討していく必要がある。
生徒指導部	児童生徒の登下校時の安全や、ルールマナーを身に付けるための取組を充実させる。	(1) 安全で安心な教育環境の整備	・生徒会による啓発放送や広報掲示を行う。 ・全校集会、部会などでの機会に指導を行う。 ・通学指導(登校指導、下校指導)を充実させる。	B	関係機関の協力を得て、交通安全や防犯についての教室を開催することができ、保護者から概ね理解も得ている。交通安全教室は、小学部と中・高等部に分けて実施することで、児童生徒に合った内容で実施することができた。また、警察と連携した登校指導は昨年度よりも回数を増やしたことで、特に自主通学をしている生徒の安全意識を高めることができた。通学指導に関しては、現在指導している場所では安全に登下校できている。

進路指導部	「進路だより」、「職員研修」、「親の会研修会」等を通して、卒業後の就労における動向や福祉サービスの選択方法や活用、進路状況等について保護者や職員に周知する。	(2) 教育ビジョン「つなぐ」の遂行	<ul style="list-style-type: none"> ・夏季休業中に講師を招いて、香川県の障害者雇用の動向についての研修をする。 ・福祉サービス事業所の詳細な情報を掲載した「進路ガイド」の内容を有効活用し、進路選択における情報を共有する。 ・総務部と連携し、保護者からの疑問点を基に「親の会研修会」や「進路だより」等で情報発信をする。 ・研究部と連携し、教員対象に企業就労、福祉サービスの現状と課題についての理解を図る。 ・「職場開拓リーフレット」を改訂し、今後の進路指導に活用する。 	B	夏季休業中の職員研修は主任相談支援専門員の方を講師として実施することができた。福祉サービスを利用するにあたって、学校のかかわり方を学ぶことができた。総務部と連携し、PTA新聞に進路指導や卒業後の進路について情報発信することができた。小・中学部教員については研究部と連携し、現職教育として進路に関する動向や卒業後の生活について周知することができた。
保健・美化部	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒、教職員の心身の健康保持、増進するような情報を発信する。 ・命や自分の体を守ることの大切さを児童生徒に伝えるため、性に関する指導の充実を図る。 	(1) 安全で安心な教育環境の整備 (3) 教育ビジョン「つなぐ」の遂行	<ul style="list-style-type: none"> ・「保健だより」や「給食だより」で、家庭でも取り入れやすい心身の健康保持に有益な情報を提供する。 ・熱中症対策や、緊急時の対応など、どの職員も同じ意識をもって対応できるように、必要に応じて研修を行ったり、その都度周知を行ったりする。 ・各学年で所有する「性に関する指導ファイル」の内容の見直しを行う。授業の参考資料などの情報提供を行ったり、学習内容を共有したりして各学部の取り組みをつないでいく。 	A	「保健だより」や「給食だより」を通して、時候に応じた内容で家庭でも実践できる健康保持の方法や食生活の見直しについての情報提供ができた。教職員に対しては、熱中症対策や緊急時の対応について動画視聴や体験活動などの研修を行い、意識を高めることができた。性に関する指導については、教材の整理や見直し、全学年の年間指導計画について検討を行った。次年度は、それらの周知を徹底していきたい。
相学談びセンターの運営	校内及び中讃地域の特別支援教育に携わる指導者の専門性を高め、幼児児童生徒への支援や指導を充実させることができるように相談支援や研修支援を実施する。	(2) 授業実践力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・連携訪問や事例検討会、青の山プラクティス（校内学習会）を実施し、相談支援の実践力の向上や専門的知識の獲得を目指す。 ・サマーセミナーを開催し、校内外の指導者の専門性の向上を目指す。 ・宇多津町の指導者を対象に特別支援教育スキルアップセミナーを行い、専門性の向上を目指す。 ・個別の教育支援計画の説明会を実施し、方針や評価の記入についての個別対応を行う。 	A	公開研修会では、発達障害当事者のこれまでの経験や思い、必要な支援について直接話を聴くことで実際の当事者の困り感を知る貴重な機会にすることができた。事例検討会では具体的な事例や実践に対する意見交換をすることで、即指導に生かすことができる知識を得て、実践につなげることができた。中讃地域の教育関係者に対しては、サマーセミナーや宇多津町スキルアップセミナー、各種研修会を通して支援を必要とする児童生徒の理解を深めたり具体的な支援方法を伝えたりすることができた。

学校評議員からの提言

<p>(大西評議員：しょうがい者生活支援センター相談支援専門委員) ・生徒が増え、学校だけでは解決できない問題が増えてきている。昔にはなかった問題が起こり、学校だけでは解決が難しくなっている。他の機関と連携してける仕組みができればと思う。制度が昔前とは変わってきているため、日々の情報交換をし、福祉との連携をより密接にしていけるとよい。福祉の立場の人間を今後も評議員として参加させてもらいたい。</p> <p>(竹内評議員：本校元校長、地元自治会) ・教室や学校が手狭で教員が足りない状況。児童生徒に目が届かず、けがなどをすることにならないかが心配になる。学校は置かれた立場でやっていく必要があるので、各部で児童生徒に目が届き、安全が確保できるような体制をとっていく工夫をしていかなければならない。改善しながら工夫してやっていくしかない。地元自治会との交流は継続してやっていければと思う。</p> <p>(横峰評議員：丸亀公共職業安定所所長) ・人手不足で大変だと思った。企業も若い人が確保できない状況であり、役職定年を見直す方向になっている。求人票のなかには条件に加えて働きやすさ等の内容を盛り込み、働きたい人の背中を押すような求人票を作成することをお勧めする。そのことがきっかけになることがある。</p> <p>(逢坂評議員：四国学院大学教授) ・資料には出てきていないいろいろな苦勞があると思う。12月の学校祭では、児童生徒がいきいきと活動していた。支援学校に興味のある学生を一人連れてきたが、大学の役目としては、学生が学校現場への興味・関心を高めていけるようにしていく必要があることを感じた。</p>
--